

十九世紀アメリカ非正統医療における癒し・出産・

自己形成—植物治療運動と水治療運動—

鈴木 七 美

十九世紀アメリカは、出産の歴史において助産者が産婆から近代的産科医へと移行する一大変動期にあった。この時期には、瀉血・下剤を頻用するレギュラー・ドクターの治療方法（ヒロイック・セラピー）や治療活動の独占傾向を批判して、イレギュラー・ドクターに率いられたいくつものメディアカル・セクターアンが登場し、癒しのありかた全般を問うポピュラー・ヘルス・ムーブメントへと発展していった。本報告は、治療・助産の変動期に出現し、とりわけ出産の「医学化」に抗して「自然な出産」を提唱した二つのセクターアン運動—トムソニアニズム（植物治療運動）とハイドロパシー（水治療運動）—の出産に関する主張を比較分析することをとおして、身体の「自然」の力・助産の担い手に関する思想とその変容を明らかにしようとする、癒しの歴史人類学（historical anthropology of healing）の一つの試みである。

産婆の時代には、十九世紀初期までアメリカで最も人気を博したとされる産婆術書 *Aristotle's Master Piece* にもみられるように、出産は「自然」の力によって進行するとされて

いた。〈痛み〉は出産の本当の時を知らせる兆候であり、また子どもを産み出すために不可欠とされていた。それゆえ助産とは、「自然」に従い、「自然」の力を援助することであった。「自然の援助者」と呼ばれた産婆の資質としては、「女性の手、鷹の目、獅子の心」があげられ、かの女は、産婦にハーブの入った飲み物や食物を与えたりまじないを唱えたりした。出産の場には他にも産婦の友人・知人・近隣の女たちが集まり援助を与えた。女たちが共有する知識は、古くから女から女へと継承されてきた経験に基づくものであった。

これに対し医者たちは、ハーヴァード大学助産学初代教授 W・チャニングらの言説にみられるように、「自然」を全面的信頼に値するとは考えず、出産の〈痛み〉を否定し、治療の対象とする。かれらは専門知識をもつ者のみが助産者として適任であると主張し、精神力や知識に欠けるという理由で産室から産婆や女たちを排除しようとした。

産婆から医者へという過渡期に現れた二つのセクターアン運動は、いずれも医者の助産を批判していたが、産業化・都市化が著しいアンテベラム期に、それぞれの生活認識を反映した主張を行なった。セクターアン運動の急先鋒トムソニアニズムは、アメリカの植物をもちいる伝統的な「セルフ・ヘルプ」の再興をめざしたニュー・ハンブシャーの一農夫 S・トムソンに率いられ、最盛期の一八三〇年代にはアメリカ全体の四分の一の人々が植物治療を適用したとされる。トムソンは、医者への助産を「自然を技術で代替する」との批判

し、医者が妨げないかぎり「自然」には十分な力があると確信していた。それゆえ、医者から助産を取り戻し「産婆術」を再興することを訴える。それは、身体の「自然」の力をアメリカ土着のハーブによって助けることであった。だが、実際にトムソンが提示したオルタナティヴは、かつての産婆術とは決定的な点で異なっていた。第一にトムソンは、ふつうの人々が日常的なセルフ・ヘルプとして植物薬をもちいることを望んだが、現実には、都市化に伴い一八二〇年代にはもはや薬草を近隣で調達する習慣が失われつつあった。第二にトムソンは、出産をめぐる女性文化の喪失と家族のプライベートルト化という状況に最も合致した方法として、夫と妻が共同する家庭内出産を勧めざるを得なかった。トムソンはさらに、出産や病気に際し個々の家族が連帯するよう尽力したが、その新たな組織はかつての女たちのコミュニティとは性質を異にしていた。

他方、十九世紀半ばにヨーロッパから移入されアメリカ独自のヘルス・リフォーム運動として発展したハイドロパシーにおける出産観は、トムソニアニズムのそれとはまったく異なる。第一に、「自然」な出産は「痛み」を伴わないはずだと理想化され、「痛み」は不健全で病気のしるしとして否定された。だが現状は、医者の助産や都市化・産業化などの社会変化により女性たちの身体の「自然」の力は衰え、もはや「自然」な出産は実現不可能だと認識されていた。そこでハイドロパシーは、個々の女性に、「準備的治療」により「第二の自然」

を構築するよう強力に勧めた。それは、ハイドロパシストたちが、社会の変動期にあつてアメリカの母としてまた家庭の守護者としての女性の役割を重要視していたからでもある。ハイドロパシーの第二の特徴は、出産の立ち会い人として、夫のみならず医学知識をもつ専門職者としてハイドロパシーの女医をあげていたことである。女医たちには、同時に「教師」として仲間の女性たちを導くことが要請されていた。夫の役割は精神的援助を与えることに縮減し、また、かつてのようにふつうの女たちが出産に参加することは否定された。

以上のように、出産の歴史の変動期に出現した二つのセクタリアン運動が提示したオルタナティヴは、顕著に過渡期的性格を体現していた。だが、いずれも、出産を自らの手に取り戻す試みをおして、「自然」との関わりをはじめとする癒しに対する姿勢、ひいては急速な近代化のうねりのなかで自分の生活のあり方を再考し癒しの主体となることを促す自己形成運動という側面を有していたことはまちがいない。

(平成七年五月例会)

多紀家関係の諸話題略記

矢数道明

一、多紀崇徳氏（元堅の曾孫）との知遇

多紀崇徳氏は、昭和三十年頃板橋区向原に居住され、通産